

27AB-pm300

初年次生に対する分野横断的統合型教育科目「薬学入門」の学習効果

○土生 康司¹, 八巻 耕也¹, 上田 昌史¹, 上田 久美子¹, 江本 憲明¹, 水谷 暢明¹, 池田 宏二¹, 八木 敬子¹, 田中 将史¹, 中山 善明¹, 武田 紀彦¹, 森脇 健介¹, 北河 修治¹ (1神戸薬大)

【目的】薬学の魅力を伝え、学生の“能動的な学び”を促すため、(1) 学習意欲向上、(2) 基礎から臨床科目までの関係の理解、(3) 学習内容レベルの向上、(4) コミュニケーション能力向上を目標とした初年次前期実施科目「薬学入門」の学習効果について、学生アンケート結果を基に解析した。

【方法】薬学入門では 1 コマ 75 分の講義 9 コマ、2 コマのスマールグループディスカッション (SGD)、1 コマの SGD 成果発表会を実施した。講義はオムニバス形式で、有機化学等の基礎系から薬剤師実務等の臨床系まで、医師、薬剤師を含む教員が他の分野との関係性を強調しながら行った。2 コマ目の SGD では“アスピリン誘導体 (スーパーアスピリン) について考えよう”というテーマで、講義を基に問題を個人で解く予習を課し、予習と同じ問題について SGD させる PBL (Question-led PBL, Q-PBL) で行った。科目開始時、講義のみ終了時、科目終了時に学生にアンケートを行い、講義、SGD それぞれの有用性について解析した。

【結果】本科目実施期間中、入学直後の高い学習意欲を維持することができた。また、講義は目標 (2) の達成に、SGD は目標 (2)~(4) の達成に繋がることが明らかとなった。Q-PBL の採用により、初年次生にとってレベルの高い内容であっても、議論を活発に行い、効果的で満足度の高い SGD を行うことができた。

【考察】分野の関連性を強調したオムニバス講義および予習を課す Q-PBL を取り入れた「薬学入門」は、学生の学習レベル、向学意欲を高め、科目間の繋がりを理解させ、コミュニケーション能力を向上させた。このことは、初年次において適切な難易度、適切な量、適切な方法のアクティブラーニングを取り入れることにより、その後 6 年間に亘る学習の効果を高められることを示唆している。